

「がん告知時代」のカミングアウト問題の研究

——早期診断された乳がん経験者の事例をもとに——

京都大学大学院 阪本浩太

1 目的

近年、がんは以前よりも日常的でありふれた病気と見なされ、「日本人の2人に1人が一生のうちにかんになる」と語られるようになってきている。がんは長らく「死と同一視されている」(Sontag 1978 = 2006) 病として恐れられてきたが、今日ではがんの5年相対生存率(全部位平均・男女計)は6割を超えており(国立がん研究センター2016)、患者の診断後の生活に関心が寄せられている。2016年に成立したがん対策基本法の改正法では「がん患者に関する国民の理解が深められ、がん患者が円滑な社会生活を営むことができる社会環境の整備が図られること」が基本理念に追加されており、これは国家課題のひとつに位置づけられていることも見て取れる。

今では患者の自己決定権が尊重されるようになり、医師から患者への「がん告知」は一般的になった。患者は成人している場合、医療専門職からさまざまな医学的知識や複数の選択肢を与えられ、どのような治療を受けるかについて選択を迫られる。そのため、患者は膨大な医療情報から正確な知識を理解し、治療方針を判断するうえでしばしば困惑することになる。かれらは医学的合理性のみに基づいて治療法を選択するとも限らない。しかし、自己決定が尊重される社会では、患者が自ら選んだ選択肢については自己責任と見なされてしまう危うさがある。このような状況において、社会は患者に対してどのような支援の仕組みを整えることができるか考察すべきだ。

このような文脈において、がん患者が直面するカミングアウトの問題について着目する。告知を受けた患者は、自らの病気について、いつ、誰に、どのように打ち明けるかについて判断することになる。がんのカミングアウトに関する問題は、患者が周囲の人物から本人が望む適切な理解や支援を得るための重要な過程のひとつと考えられるが、患者本人がこれについて困難な選択を強いられる状況が生じている。本報告では患者たちがどのようにこの問題に対処しようとしているのかについて論じる。

2 方法

本報告では、乳がんを経験した女性の事例に着目する。乳がん患者はがん告知が一般的でなかった時代にも告知を受けてきた背景を持つ(門林2011)。乳がんは触診が可能であり、医師が患者に実際の病名を隠すことは難しい一方、患者本人は日常生活では病気を隠すことができる場合が少なくない。さらに、乳がんは再発する可能性の高い期間がほかの部位と比べて長期に及ぶため、乳がん患者は長期にわたって治療生活を続けており、カミングアウトに関する問題に直面する機会が多いと考えられる。

今回は5名の乳がん経験者から調査協力を得た。調査は2017年から2018年にかけて行い、それぞれの調査協力者に、がんと診断された経緯や、病気に関して周囲の人物にどのように話をしていたのかについてインタビュー調査を実施した。

なお調査にあたって、学術目的のため、データを匿名化したうえで発表する許可を得ている。

文献

門林道子, 2011, 『生きる力の源に—がん闘病記の社会学』 青海社。

国立研究開発法人国立がん研究センターがん対策情報センター, 2016, 「全国がん罹患モニタリング集計 2006-2008年生存率報告」。

Sontag, Susan, 1978, *Illness as Metaphor*, New York: Farrar, Straus and Giroux. (= 2006, 富山太佳夫訳『隠喩としての病い／エイズとその隠喩』みすず書房。)